

環境

横浜の気象

平均気温は上昇傾向、
猛暑日や熱帯夜も増加

日本の年平均気温は、様々な変動を繰り返しながら上昇しており、上昇率は100年当たりプラス1・40℃で、世界の上昇率のプラス0・77℃を上回っています。また、日最高気温が35℃以上の猛暑日や日最低気温が25℃以上の熱帯夜の発生日数も増加傾向にあります。

横浜においてもこの長期的傾向は同じです(図1)。都市化の影響のある中、横浜の年平均気温は100年当たりプラス2・1℃、真夏日(日最高気温が30℃以上)は100年当たりプラス19日、熱帯夜はプラス23日となっており、全国平均を上回る伸びとなっています。また、日最低気温が0℃未満の冬日は、100年当たりマイナス40日で減少傾向にあります。

市内の夏は、日中は北部、
夜間は東部で高温の傾向

市内36地点の2025(令和7)年7月・8月の気温測定結果によれば、猛暑日の日数は市域の北部、熱帯夜は東部の海沿いの地域が多くなっており、日中及び夜間における気温の傾向の違いが見られます。また、平均気温は東部の横浜港周辺地域で高くなっており(図2)、平均気温の最も高い地点と低い地点の差は1・7℃となっています。

図1 横浜地方気象台(中区山手)での平均気温等の推移
気象庁

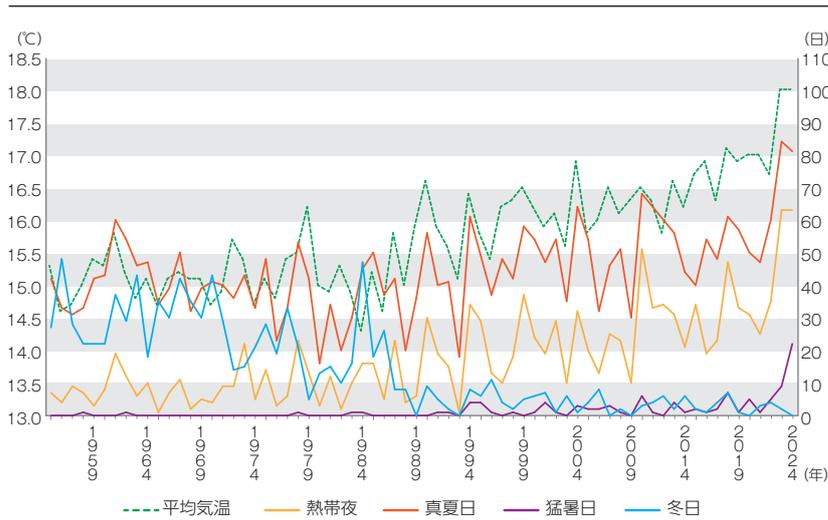
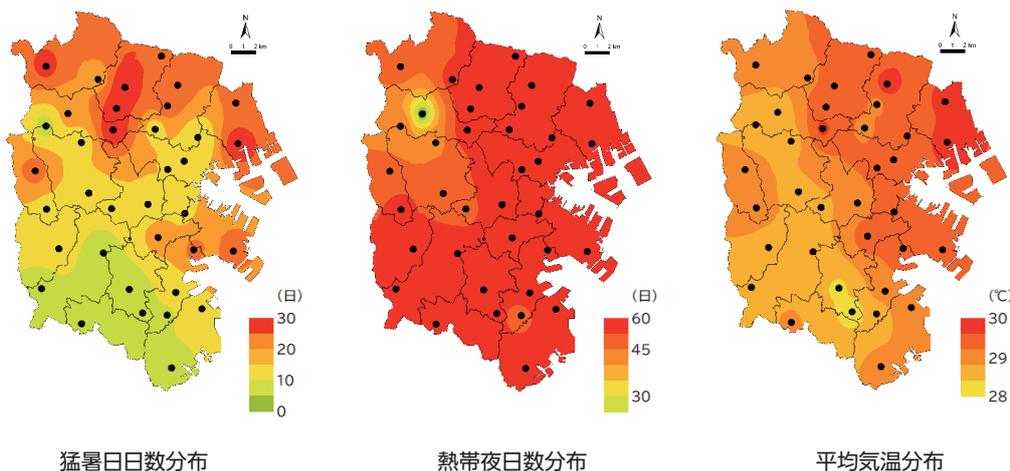


図2 2025(令和7)年7月・8月 猛暑日日数、熱帯夜日数、平均気温分布
横浜市みどり環境局



短時間強雨の増加

気候変動の影響などにより、風水害が激甚化しており、降雨による道路冠水や床上・床下浸水などのリスクが高まっています。全国の1時間降水量50mm以上の年間発生回数の長期変化傾向を見ると、最近10年間（2015～2024年）の平均年間発生回数（約334回）は、統計期間の最初の10年間（1976～1985年）の平均年間発生回数（約226回）と比べて約1.5倍に増加しています。

横浜を含む関東甲信地方においても、最近10年間の平均年間発生回数は、統計期間の最初の10年間と比べて約1.6倍に増加しています（1979～1988年平均で約0.12回が2015～2024年平均で約0.19回に増加）（図3）。なお、1時間降水量50mm以上の雨とは、「非常に激しい雨（滝のようにゴーゴーと降り続く）」レベルとされています。

一方、横浜の年間降水量はおおむね1500～2000mmで推移しており、長期変化の傾向は見られていません。

震度1以上の地震は、この5年間は年40回程度

横浜で観測された震度1以上の地震は、東日本大震災のあった2011（平成23）年に312回を記録しましたが、最近5年は年40回程度で推移しています（図4）。

なお、2024（令和6）年度の横浜市民の防災・減災の意識、取組に関するアンケート調査によると、災害対策について、横浜市に力を入れて取り組んでほしいことは、「水・食料・毛布などの十分な備蓄」（62.5%）、「電気・ガス・水道・電話通信などのライフライン施設の耐震性の向上」（57.1%）、「緊急時の警報や避難指示などを伝達する体制や仕組みの強化」（45.9%）の順となっています。

図3 関東甲信地方[アメダス]1時間降水量50mm以上の年間発生回数
気象庁

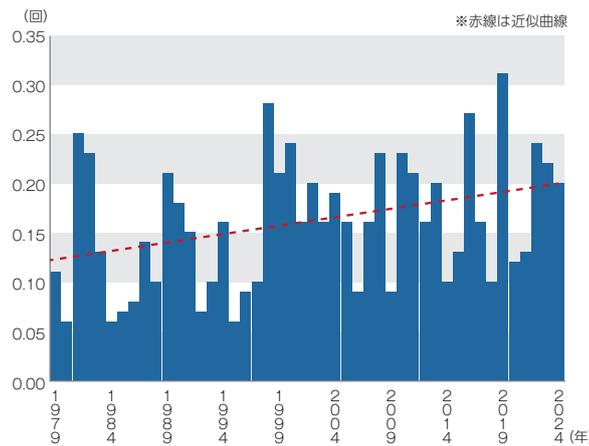


図4 震度1以上の地震回数(横浜市中区山下町で観測)
気象庁

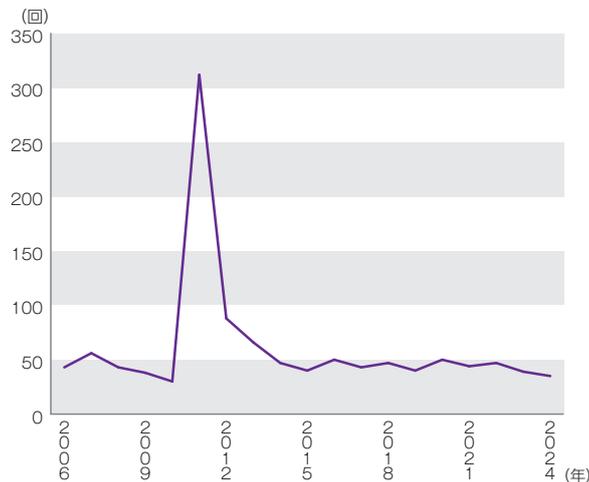


図5 緑被率の推移
横浜市みどり環境局

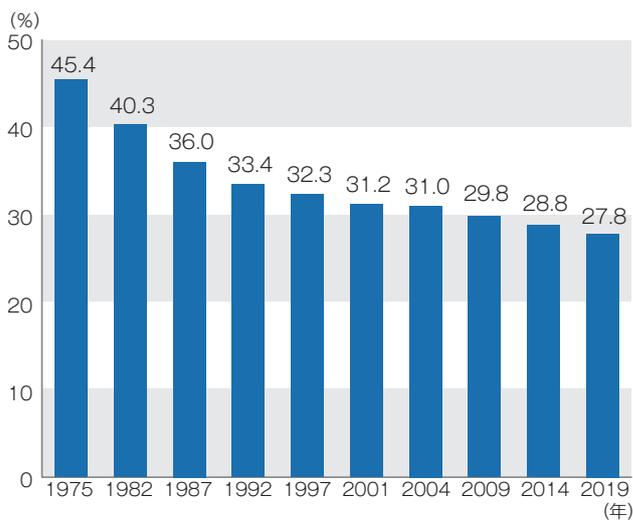
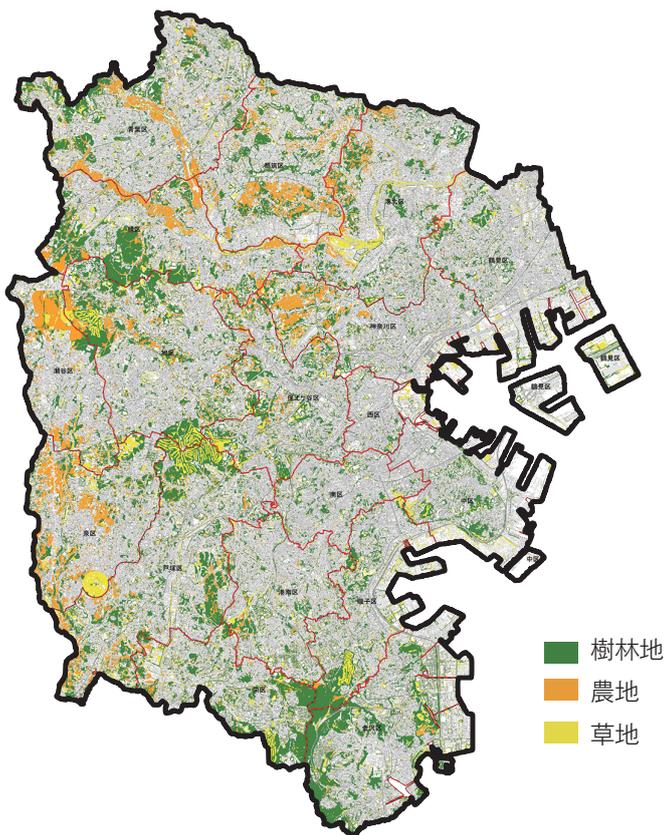


図6 緑地分布図2019(令和元)年度
横浜市みどり環境局



横浜の緑

緑被率の減少は緩やかに

2019(令和元)年度調査によると、横浜市の緑被率は27・8%で、2014(平成26)年の28・8%から1・0ポイント減少しています(図5)。緑被地の内訳は、樹林地16・7%、農地5・5%、草地5・6%で、面積と

しては、2014(平成26)年から417haの減となっています。

区別の状況では、緑被率が最も高い区は緑区(40・6%)で、最も低い区は西区(11・3%)でした(図6)。

なお、緑被率は、航空写真から300㎡以上のまとまりのある緑を目視判読し、市域面積に占める割合を算定したものです。このほか参考値として、個人の庭などの細かな緑の状況を把握するため、画像解析等による10㎡以上

の緑被率が集計されており、その割合は33・8%となっています。横浜の緑は、都市化が進む中で大きく減少してきていますが、緑の減少に歯止めをかける取組や、市街地における緑の創出により、減少は緩やかになっています。